

小艦隊の戦略的運用 (画期的事件)

漢和防務評論 20151201 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

ロシアのシリア所在 IS に対する巡航ミサイル攻撃について、KDR 平可夫氏は海戦史上、画期的な事件であると述べています。
26 発の巡航ミサイルは、カスピ海に所在するカスピ小艦隊の小型艦艇から発射されたもので、同水準の小型艦しか保有しない小海軍国を鼓舞することになった、と。ロシアに肩入れしがちな平可夫氏は、軍事技術大国としてのロシアが健在であることが証明されたとしています。また平可夫氏は、ロシアとシリアの歴史的な関係についても特に強調しています。

平可夫

漢和平可夫特集記事：

この 10 月、ロシアは、カスピ海所在の小艦隊（2 種類の水艦 6 艘）から 3M-14T 型巡航ミサイル発射し、シリア国内の IS の戦略目標を攻撃した。そのうちの 1 艘は、満載排水量 2000 トンの GEPARD P-1166.1/K 級ミサイル護衛艦である。ロシアは、カスピ海小艦隊に同型艦を 2 艘（DAGESTAN 及び TATARSTAN）保有している。今回巡航ミサイルを発射したのは DAGESTAN であり、同艦に装填されていたのは 8 連装、垂直発射の 3M-14T 型巡航ミサイルであることを意味する。そのほか 4 艘の発射プラットフォームは、BUYAN-M (P-21361) 級近海パトロール艦で、基準排水量は 500 トン、満載 900 トンである。上記の 6 艘は全てカスピ海小艦隊に配属されている。

3 艘の 21360 タイプと 3 艘の 20361 タイプがあり、20361 は 8 連装の垂直発射機を装備し、3M-14 を使用している。当然、これらの汎用発射機は 3M-54 系列の艦対艦ミサイルも発射することが出来る。

4 艘の水艦から全部で 26 発の巡航ミサイルが発射された。ロシア国防부는命中精度は 3 M であると述べている。これは一つの軍事革命であることは疑いが無く、“小艦隊が戦略的に運用された重要な先例”となった。26 発の巡航ミサイル発射は、テレビ映像によると：発射速度は 1 秒間に 1 発で、2 つの国家の上空を飛び越え、1500 KM 離れた目標に着弾した。このミサイルは、単に戦術的な観点から発射が決定されたのではなく、衛星航法、デジタル戦争、情報化戦争、国際外交、等の多種複雑な問題及び戦略的な問題を解決して初めて発射可能になった。
厳密に言えば、カスピ海小艦隊は海軍ではなく、“湖軍”である。湖海軍でも遠洋

海軍と同様に戦略的使命を果たせるという海軍戦史上の先例を作ったのである。
26 発の巡航ミサイルは、ロシアにとって戦略的に如何なる意味があるのか？

第一、ロシアのシリア出兵は、国家と民族の強い意志の表現であり、核心利益を死守するための戦いである。真の戦いと口先だけの戦いは明らかに異なる。口先だけの戦いは容易である。シリア出兵は熟慮した結果である。大きな危険を冒すことは、NATO 特に米国と空中での衝突に発展する可能性がある。KDR は過去に何度も強調した。冷戦時代から、米ソ両国の覇権争いの第一の核心利益は、欧州である。第二の核心利益は、中東であり、中東を支配することは、すなわち近東、遠東を支配することである。大航海時代に樹立されたこの戦略理論は、現在も変化はない。ソ連及びロシアにとって、中東ではシリアのアサド父子だけが最も忠誠で信頼できたのだ。彼らはモスクワに背いたことは過去一度もなかった。エジプトやカダフィーのリビアは信頼できず、したがってロシアはシリアのために出兵しようとした。

第二、なぜロシアは、カスピ海小艦隊を選択したのか？ロシアの戦略巡航ミサイル戦力に就いて述べる。その他のロシアの 4 大艦隊は、当然 TU-160、TU-95 戦略爆撃機に搭載する KH-55 型通常弾頭/核弾頭兼備の戦略巡航ミサイルを保有している。しかしロシアがカスピ海小艦隊を選択したのは何度も検討した結果である。同艦隊はロシア海軍艦隊の中で最もシリア、イラクに近く、巡航ミサイル攻撃は、この 2 つの国の上空を飛び越えるだけで可能であった。しかも両国ともロシアに友好的であり、外交上の抗議をうける可能性が少なかったからである。黒海艦隊にはこのような利点がなかった。黒海で発射すると、トルコ上空を飛行しなければならず、面倒であった。その他の艦隊はさらに利点が無かった。カスピ海小艦隊は中央アジアに所在しており、今回の巡航ミサイル発射は、すでに NATO、中東、極東の中国に対する脅威ともなっている。もし KDR の予測が正しければ、今後 TU-160 等の戦略爆撃機は、巡航ミサイルによる IS 攻撃に使用されるであろう。ロシアは、1995 年のチェチェン戦争時代から航空機搭載巡航ミサイルを使用した国外テロ分子攻撃について議論してきている。

3M-14T の射程はどの程度か？ロシア官方は未だ公表していない。本誌は、極めて親しい NOVATOR 設計局の責任者、設計師に対し何度も取材を重ねてきた。輸出型の 3M-14E は射程が 300 KM である。このミサイルは、すでに KILO 潜水艦と共にインド、ベトナム、アルジェリア海軍に輸出された。ベトナムは、ロシアの技術支援を受けてミサイル護衛艦を自力生産するであろう。水上艦から発射する輸出型の 3M-14TE 型は、今後ベトナム、インド等に輸出される可能性が極めて高い。そのときには、ベトナムの小海軍が、KILO+3M-14E を使用して 300 KM 以内の中国の大都市に巡航ミサイル攻撃を行う能力を保有することになる。今回の巡航ミサイルの発射台の一つは GEPARD P1166.1 であり、ベトナムも同艦を保有し KH-35 艦対艦ミサイルを搭載している。これを CLUB 系列の対陸地攻撃弾に改装することは相当容易である。輸出型は射程 300 KM である。

KDR は 3M-14T の射程に就いて何度も質問したが、権威筋からの返答は無かった。国際間では、輸出型に比べ、相当大型化した 3M-14T の最大射程は 2000-2500 KM に達する可能性があると言われている。もし射程が 2000 KM であれば、全ての中央アジア地区と中国新疆地区が射程内に収まる。カスピ海小艦隊は、ロシアにとってどの程度重要なのか？以上の事実から重要性は論ずるまでもない。なぜならロシアは、陸上に 3M-14T 或いは KH-55/555 巡航ミサイルを配備できないからである。

第三、カスピ海小艦隊が 3M-14T を発射した際の技術は相当レベルが高い。ロシア国防部によると、飛行のミッドコースでは衛星誘導を採用し、人家密集地を避け、直接目標に命中させた。精度は 3 M である。ロシアは、当然民用版の GPS を使うことはしない。今回の攻撃は、ロシアの軍用版 GLONASS 衛星誘導技術が使用された。これはデジタル化戦争、宇宙化戦争の先駆けになったことを意味する。終末段階で採用したのはレーダー画像或いは画像照合誘導技術である可能性が高い。そうでなければこれほど高い命中率にはならない。

このほか、目標を精確に攻撃しようとするならば、相当精確な人間からの情報、衛星偵察情報、及び目標の存在を顕示する必要がある。そうでないと誤爆する可能性が出てくる。今回の攻撃は、米国だけでなくロシアも全地球において精確な攻撃が出来る能力を持つ大国であり、軍事上、依然としてスーパー大国であることを証明した。

今回の攻撃は、小海軍国家を勇気づけた。この攻撃の少し後に、本誌平可夫は、台湾国防部の消息筋と意見交換を行った。彼は：我々の沱江級ミサイルパトロール艦は少なくとも 8 発の雄二 E 型巡航ミサイルを搭載し、多くの戦略目標を攻撃できると述べた。

理論上は、確かにその通りである。ベトナム海軍については言うまでもない。艦隊が密集して陸地に向けて巡航ミサイルを発射するのは、もはや米国海軍の専売特許ではなくなった。

IS に対する 26 発の巡航ミサイル攻撃は、再び”海から陸を攻撃する”海軍戦略の変化を体現することになった。

今回の攻撃は 900 トンの小型艦船から発射されたものであり、確かに国際軍事アナリスト達を震撼させた。数年前、KDR 平可夫は、ロシアの海軍、艦船設計師達に好意をもって次のように助言した：中国海軍は近海から遠洋に出ようとしている。ロシア海軍は遠洋から近海に戻るのか！と。ロシア人達は黙して語らなかった：戦いになれば分かることだ、と。

第四、如何なる武器も、特に誘導兵器は、閱兵式で展示するだけではなく、実戦でのテストが不可欠である。実戦でテストを受けて初めて本国及び国際市場に出せるのだ。今回の巡航ミサイル攻撃は、有効な生きた広告となった。ロシアの艦船、3M-14/54 系列の対陸、対艦船ミサイルは今後多くの国家に推奨されるであろう。

参戦した航空機、爆弾、ミサイルは実戦でのテストを経た。

以上